

# ユースワーカーの専門的力と其の育成のあり方

立命館大学と京都市ユースサービス協会の共同研究に基づいた提案

How to educate expertise of youth-worker

○水野 篤夫・竹田 明子

Mizuno Atsuo・Takeda Akiko

公益財団法人京都市ユースサービス協会

Kyoto City Youth Service Foundation

Key words: ユースワーク, ユースワーカー, 専門職養成

## 目的

立命館大学と京都市ユースサービス協会の共同研究で進められてきた、若者の成長を支える専門スタッフ＝ユースワーカーの養成のあり方の検討を踏まえ、ユースワーカーの専門的力とはどのようなもので、どのように育てられるのか、現時点で整理されたことを発表する。

共同研究の当初の目的は、ユースワーカー養成のためのカリキュラム開発にあり、その検討を受けて、2006年度から立命館大学応用人間科学研究科において、ユースワーカー養成プログラム（以下養成プログラム）が開設された（詳細は別紙要項を参照のこと）。

このプログラムはユースワークコア科目（概論・演習・実習）と応用人間科学研究科の開設科目の中から医学・心理学、社会学・ソーシャルワークの二つの領域での指定科目（合計14単位）を履修することで、履修証明を得られるもので、開設以来50人余りが認定を受けている。その内、直接ユースワーク関連団体・機関で働いている人は1割に満たないが、司法・警察・福祉などで若者に関わる職に就いている人、学校教員などを含めると半数余りの修了者が、何らかの形でユースワークに関する学びを生かしている職にいる。

この発表では、養成プログラムの実習とそのふり返りを中心として進められる演習において、受講生がどのように学び、力を形成しているのか、ユースワーク実践団体の調査研究の中で明らかにされつつある、「ワーカーの力のコア」との関連で、現プログラムの達成点、課題点は何か、整理し提示する。それにより、対人援助における専門スタッフの養成のあり方に対する新たな知見を提案する。

## 方法

本報告では、これまで行われてきたユースワーク演習・実習の場面で、具体的にどのようなプロセスで、実践者としての学びが起こっているのか、いくつかの場面を取り上げて分析する。また、報告者の所属団体も含めた、ユースワーク実践団体における調査・研究の過程で抽出されてきた、ユースワーカーの力のコアについての考え方（資料別紙）とも比較検討する。

## 結果及び考察

養成プログラムにおける実習は、概ね90時間を標準時間として設定しているが、短期集中での実施は稀で、主に3～4ヶ月に亘り実習現場に通って行われるケースが多い。実習では、若者と関わる体験の機会を度重なって持つが、それを演習授業の場で、実習記録を読み合いながらふり返ることで、実習生の中に実習体験が「経験」として腑に落ちていくことが、多くの場面で観ることができた。演習の中で他の受講生とともにふり返られることは、スキル面ばかりではなく、実習生の感情や自己理解の有り様や、若者やその場の状況に対する把握・理解に関わる場合も多いことが分かる。実践団体調査から見出された、ユースワーカーの力の4つの領域（センス・マインド・スキル・ナレッジ）に触れる養成プログラムとなっていることが示された。

最後に、今後に向けた課題とそれを踏まえたカリキュラムの考え方を簡略に提示する。①リカレントモデルの学びのシステムが必要である。実践と省察を繰り返すことで力そのものも更新させていくスタイルである。②個別・グループ・社会システムなど対象や関わりの場面ごとの能力育成が考えられる。③カリキュラムとして、ナレッジやマインドを支えるレクチャー、ユースワークシーンを素材にした事例検討、また個人としての能力を鍛えていくためのトレーニングが挙げられる。④力量形成を個人の能力に収斂させず、“組織についたもの”としてチームで育成・維持させていく構造、ユースワークの業界形成が必要である。

## 参考文献

- 水野篤夫/遠藤保子「ユースサービスの方法及びユースワーカー養成のプログラム開発～ユースワーカー養成に関する研究会の議論から～」(立命館大学人間科学研究第14号)
- 生田周二『子ども・若者支援専門職養成に関する総合的研究』(科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書,